



イタリア人的勤労観

小泉 達治

小生は2001年10月から2年間、イタリア・ローマにある国連食料農業機関（FAO）に勤務したがそこで感じたことを本稿では紹介したい。

小生が初めてFAOに赴任した日のこと、怖い面持ちの軍警察および警備員から入館を許され、リベリア人の課長、ネパール人、スーダン人等の同僚への挨拶を済ませた後、所用の庶務手続きを行うよう指示を受けた。その庶務手続きを行う課長の秘書達（4人の女性）のところへ行ってみても全く連絡がつかない。何度電話しても、部屋へ行っても接触できない。メモを残して失意のうちに最初の1日は過ぎ去ってしまった。

FAO等の国連機関には専門業務に従事する専門職員と秘書等の業務に従事する一般職員とに大別されているが、特に一般職員は現地採用が基本であるため、イタリア人（女性）が圧倒的に多い（この他、イタリア人と結婚した英仏系女性）。一般に彼女達は朝は9時過ぎにゆっくりと出勤し、その後にはすぐに同僚と誘い合わせてコーヒータイム、これがやたらと長い。この長いコーヒータイムの後にようやく仕事を始めるのが10時も半ばを過ぎたころである。その後に、ランチタイムそして断続的に続くコーヒータイムと2時頃によりやうく業務を再開する。そして3時にはまたコーヒータイムが続き、それが終わると酒類、たばこ、食料品等が格安で買えるFAO内のスーパーで買い物をした後に5時には帰宅する。彼女達、一体いつ仕事をしているのだろうか当初は非常に疑問に思った。やはり、

イタリア人は聞きしに勝る働かない人種だと思った。特に、それ以前に米国農務省に派遣された小生にとって、猛烈な米国人の勤労観に触れた後だけにショックは大きかった。

しかしながら、そのうちに解ってきたのであるが、彼女らは単に怠けているのではなく、やるべき事はちゃんとやっているのである（この点については異論のある方もいると思うが）。私が初日に彼女らに会えなかったのは、彼女らの「生態」をきちっと把握していなかったためである。短期的にはいつ問題が処理できるかいろいろすることはあるものの最終局面で問題が解決されていることが多い。実際、小生も個人的にも彼女らには住居探しから、論文のエディティングまで公私にわたり助けられた。このことは、他のイタリア人一般職員や専門職員についても当てはまるのだが、彼らは日本人や米国人に比べて、業務時間は少ないのであるが時間当たりの生産量、生産性効率は他の民族に比べて格段に高いものと思われる。また、このコーヒータイムは憩いの時間であると同時に情報収集および共有の場であり、時として打ち合わせを行っていることもあり、決して怠けているだけではないのである。日本人の価値観でもって怠けているとは判断できないのである。彼らは最も業務を集中的に行える時間に業務を行い、より効率的にそしてより楽しく業務を行い、業務以外の残りの時間を有効に使う「術」、いわば人生を豊かに生きる「術」を知っているのである。

最近では日本人もイタリアから取り入れるべきものは従来のファッション、料理、サッカー等から内面的なイタリア人的生き方についても学ぼうという風潮へと変わってきている。もちろん、日本人がイタリア人的生き方をそのまま真似することは無理があるものと思われるが、一般的に、業務内容ではなしに勤務時間の長さも業務の成果としても評価しがちな日本人（小生を含めて）にとってこのイタリア人的勤労観は対極的なものとして一考に値するのではないか。

誠に勝手ながらそう感じた。